

6-5			
主題	トイレでの排便がもたらしてくれたもの		
副題	当たり前のことを、当たり前。		
キーワード1	トイレに座りたい	キーワード2	ポータブルトイレ
研究期間	1 ヶ月		
法人名	社会福祉法人 すこやか福祉会		
事業所名	特別養護老人ホーム やすらぎの郷		
発表者	町田 章（まちだ あきら）	アドバイザー	なし
共同研究者：大森 亜由美（おおもり あゆみ）			
電 話	03-5648-8250	F A X	03-5648-8251
今回発表の事業所やサービスの紹介	地域に開かれた福祉の場として、文化行事の開催や施設利用の場を広げています。障害をもっても認知症を有しても、地域とのつながりをもってその人らしく暮していくことを援助して行きたいと考えており、キーワードを“在宅”として、在宅で過ごしていたように暮していける施設づくりを進めています。		
《1. 研究前の状況と課題》 排便周期が読めず、下剤を使用しなければならぬ利用者はオムツの中に排泄することにより、すぐに気付く事が出来ない、それにより皮膚状態が悪化してしまう。職員としても対応に時間を要してしまう、そして何より利用者に不快な思いをさせてしまうという問題点を抱えていた。 皮膚状態が悪化すれば、利用者は痛みを伴い、下剤に対しても嫌悪感が生まれてしまう。職員としても皮膚疾患に対して処置（医療職の指示のもと軟膏の塗布など）を行ったり、普段以上に体位交換の必要性が出たりと、日々の業務を円滑に行うことが出来なくなってしまい、排泄以外の部分にも支障をきたす可能性があった。		《2. 研究の目的ならびに仮説》 下剤を使用したとしてもオムツの中に排泄するのではなく、トイレに座って排泄してもらいたい。トイレに座ることが難しいのならポータブルトイレに座って排泄し、不快に感じることなく排便をして欲しい。そしてトイレで排泄を済ませることが出来れば排泄物は皮膚に付着することなく、皮膚疾患も無くなるのではないか。また皮膚疾患がなくなれば援助員の業務も処置などが減り、より円滑に進むのではないかと考えた。	

《3. 具体的な取り組みの内容》

対象者：ポータブルトイレ使用可能かつ、排便周期が読めない及び尿量の多い利用者5名（そのうち皮膚疾患2名）

手順・方法：毎日の排泄介助の時間にポータブルトイレを使用する。（本人拒否時は除く）また浣腸などを使用する利用者は使用後にポータブルトイレに移乗し、排泄を試みる。

期間・評価内容：評価するのは1ヵ月後。ポータブルトイレでの排泄の状況、皮膚疾患の状態。

参加した職員：援助員総勢30名

連携した機関：看護師4名

使用した道具：ポータブルトイレ

費用：0円

《4. 取り組みの結果》

コミュニケーションが取れる利用者、便意が何となくでもある利用者にはポータブルトイレに座るか伺うと大半の利用者が「座る」と答えた。その他の利用者に関しても座ること自体に拒否はなく、問題なく介助を行うことが出来た。

腹圧がかかりやすいこともあり、ポータブルトイレに座るとほぼ毎回排尿が見られた。またパッドも汚れていないことがあり、不快な状態で過ごす時間を減らすことにも成功した。浣腸を実施する利用者、座薬により排便を促す利用者においては処置後、ポータブルトイレに座ることで、オムツ内で排泄するよりも多量の排便を確認することが出来た。

皮膚疾患がある利用者はオムツ内で排泄物と皮膚が触れ合わないことで徐々に改善が見られてきた。そして出る時間が大体決まってきたことで排便周期も決まってきたこと、便汚染により更衣をしたり、リネン類の交換も減ったので、時間短縮にも成功した。

《5. 考察、まとめ》

今まではポータブルトイレに座ること自体、「時間がかかって面倒」と捉えていたこともあった。しかし、その手間を惜しまないことで結果として時間の短縮、利用者の不快感削減、皮膚疾患を減少させることが出来た。そして人生において人の排泄物を見てこんなにも喜ばしい体験は初めてだった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

特になし。

《8. 提案と発信》

私たちの発表の最終目標は、ただポータブルトイレに座って排泄をしてもらうことではありません。今まで、何十年と繰り返してきたはずの、「人がトイレで排泄をする」という行為。

それが、加齢や病気などにより難しくなり、オムツを当て、それが当たり前になってしまうということ。また、介助者も、それをあたりまえとしてしまうこと。

ただ目の前の業務に追われるのではなく、その人自身を見つめていくことで、見えてくることがあります。ポータブルトイレに座って排泄ができたことで、「良かった」と笑ってくれる「人」がいます。

人が人を支え、援助をしていく介護という仕事の素晴らしさを、介護の現場で働く人はもちろん、それ以外の人々にも伝えていきたい。その目標をもって、我々はこれからも「その人らしく」を大切に、利用者と一緒に過ごしていきたいと考えています。